

# 「心理的瑕疵物件のペット」

—初稿—

2026/01/15  
しののめ ののの

人物表

向田 英一

(27)

賃貸不動産屋の営業

湊 大介

(36)

向田の職場の店長

## クロネコ不動産の店舗内（昼）

賃貸物件を紹介する為の、ありふれた店舗。

向田英二（27）と湊大介（36）、接客カウンターで暇そうにだらけきつている。

「……てかさあ」

「はい」

「幽霊って、結局なんなんだろ」

「え？」

「不動産業界的には何にあたるのか、定義する必要があるじゃね？」

「……心理的瑕疵物件、とかじやなくて？」

「いやさあ」

湊、手元の物件資料に目をやる。

「前の住人が残してつた家具とかは、残置物にあたるじゃん？ あとは、物件に最初からついてる設備？ 幽霊つて、設備なのかな」

「ええ？」

向田、ニヤッと笑う。

「前の住人が連れてきちゃつたとかなら、残置物かもつすねえ。それか……ペットとか？」

「置き去りにされたペット？ かわいそう」

湊、物件資料を向田に見せる。

「確認しに行こつか」

「うーわ最悪！。俺苦手なんすよ！」

「しょうがないじゃん、問合せ入つちゃつたんだから。誰もこの物件の詳細知らないんだもん」

「誰も現地確認しないんすか？」

「うん。大丈夫だつて、この時間だしさ。俺も行くから」と、立ち上がる。

向田、仕方なく腰を上げる。

## 空き家・外観（昼）

うつそうとしたボロい一軒家の前に、車が停まる。  
向田が降り、渋い顔で空き家を見上げる。

湊が運転席から声を掛ける。

「車停めてくる。先入つてて」

向田 「入るわけないでしょ。待つてますよ」

湊、笑いながら車で去る。

向田、恐る恐る家の周りを確認する。

家の裏手は小さな丘のようになつており、好き放題に伸びた草木が侵食してきている。

向田 「……幽霊以前に、虫もやばそゝ」

向田、こわごわ外観の写真を撮つてみる。すぐにデータを確認するが、異変はない。

向田、息を吐く。慎重に周囲を歩き回り、設備を確認したり、時折写真を撮つたりする。

しばらくして湊がやつて来る。

「外観撮れた？」

「はい、一応」

「じゃ、早速行きますか」

向田 「はあ……やだなー」

湊と向田、玄関へ向かう。

### 3. 空き家・玄関内（昼）

湊と向田、鍵を開けて玄関へ入る。

中は雨戸などが完全に閉め切られており、昼間とは思えないほどの暗闇。

「暗つ」

「ブレーカー、ブレーカー……」

湊、玄関付近のブレーカーを探し当てる上昇るも、

電気が点かない。

「切れてるじゃないすか。最悪！」

二人、スマホのライトを照らす。

湊 「足元気を付けて」

二人、玄関の戸を開けたまま、慎重に中へ進む。

廊下の先にリビングの扉があり、玄関からの光が届きにくい構造になつていてる。

向田 「いや暗いってえ」

二人、リビングへ入る。

湊、リビングの窓に近づき、雨戸を開ける。

弱い日が差し込んでくる。

「日当たり悪……」

「写真撮ろ、写真」

「嫌ですよ。湊さん撮つて」

「ええ？ 外観は撮つてたじやん」

「それとこれとは別」

向田、室内の写真を撮つて向田に見せる。

「ほら、大丈夫じやん」

「いいくてもうく」

「俺、水回り見てくる。向田、2階行ける？」

「ええ？ わざわざ分担しなくても良いじゃないすか～」

「ビビりすぎだつて。なんもないのでしょ、この感じ」

向田、ため息を吐いて湊と分かれる。

#### 4.

##### 空き家・2階（昼）

向田、恐る恐る階段を上がつて来る。

2階も真っ暗。

向田が雨戸を探そうと踏み出した時、何かが背後を通つたような物音がする。

「うえつ？」

向田、びっくりと振り返る。

「……なに？ 湊さーん？」

向田、声を張り上げる。

階下から気の抜けた湊の声。

「どしたー？」

「……なんでもないっす」

向田、気を取り直して雨戸を探す。

覗いた部屋が広めの和室になつており、雨戸が閉められている。

向田、近づいてガラス窓を開ける。

続いて雨戸を開けた瞬間、何かが飛び掛かつて来る。

向田

「うわあっ」

向田、思わず飛び退く。

よく見ると蛇が足元に落ちている。

向田 「え、蛇？ うわああっ」

蛇が突然機敏に動き、そのまま和室の押し入れへ。少し空いたふすまの隙間から、中へ入っていく。

向田、思わず勢いよく押し入れの戸を閉める。

向田 「……やばあ」

向田、恐る恐る押し入れに近づき、聞き耳を立てる。

物音はしない。

向田 「……やばあ」

向田、急ぎ足で部屋を出て階段を下りる。

向田 「湊さん、湊さん」

湊の声 「なんかあつた？」

向田 「幽霊って、やつぱペツトだったみたいですね。いや、ペツトっていうか野生なんですけど……」

向田、リビングに入る。

雨戸が閉まっており、真っ暗。

向田 「……え？ 湊さん？ もう雨戸閉めたんすか？」

返事がない。

向田、慌ててキッチンや風呂を覗きに行く。  
どこにも湊の姿はない。

向田 「え……？」

向田、突然弾かれたように玄関へ向かう。

玄関の扉が閉まっている。

飛びついで開けようとするも、鍵が掛かっている。

「え？ なんで？」

向田、慌ててガチャガチャと開けようとする。

その時、耳元でおどろおどろしい声が聞こえる。

謎の声 「ペツトなんかじやない」

向田、絶叫。

何とかして玄関の鍵を開け、脱出する。

## 空き家付近の有料駐車場（昼）

向田が闇雲に走っていると、乗ってきた車を発見。

半狂乱で駆け寄ると、車内で湊が必死にドアを開けようとしている。

「出してくれ、出して」

「は？ 何やつてるんですか」

と、声を荒げる。

「開かないんだよ、助けて」

「いや、そういうのやめてくださいよ。わざとでしょ全部」「何が？ 僕ずっとここにいて、出られなくて……」

と、湊、苦しげに悶絶し始める。

向田 「え？ 湊さん？ 湊さんっ」

向田、必死にドアを開けようとするとも開かない。

湊、しばらく苦しみ、泡を吹いて崩れ落ちる。

向田 「うあ、うわああつ。だ、だれかあつ」

向田、その場から逃げるよう走り去る。

## 6. 空き家・外観(昼)

向田の叫び声が響く中、何者かが2階和室の窓の内側から、ひつそりと雨戸を閉める。

おわり